

「写真展 辺野古の今」を見て

伊豆の山 川瀬渉貴

7月9日(日曜日)北坂戸のオルモで、1日だけの写真展が開かれ、米軍普天間基地の代替地として着工されている名護市辺野古岬周辺の状況が100枚ほどの写真によって紹介されていました。

山・川・海が連動する独特の生態系から生まれたサンゴ礁や絶滅危惧種のジュゴンやウミガメなどが生息する辺野古大浦湾海域を、今後100年も200年も使用に耐え得る米海兵隊基地に変えてしまうということです。

辺野古での座り込みは1997年から現在まで休みなく続けられているということですが、座り込みを排除される時、一人ずつ機動隊員2人に両側から腕を取って引きずられていくので、脚や下半身を擦りむいて深い傷を負うので後が大変だということです。

テント村に、多い時は200人ばかり集まるそうですが、こんな写真の一枚がありました。20~30人位しか集まらなかったときのゲート前座り込みの風景ですが、人数が少ないので一人ずつバラバラに間を空けて、ゲート前の車道いっぱい、あちらこちらにと広がって、

ジジババが座り込んでいる景色。なんと孤独で、風格があって、それでいて見ていて思わず笑みが込み上げてくるような滑稽さもある一幅の絵。



他人事と笑ってはいけませんね。私たち己自身も同じ状況に置かれているのだから…。

主催者の「名護市辺野古キャンプシュワブゲート前

テント村」スタッフや当日の会場担当の皆さん、忙しい中での1日展示会、大変ご苦労様でした。

さて、テイネイな(お粗末な)ウソとハッタリの秋の陣に備え、もう一度丁寧に、次の本を読み返してみることにしました。

- **日本はなぜ「基地」と「原発」を止められないか**
矢部宏治著 2014年10月 集英社発行
- **日本はなぜ「戦争ができる国」になったか**
矢部宏治著 2016年6月 集英社発行
- **21世紀の戦争と平和**
孫崎 享(うける)著 2016年6月 徳間書店発行

「10区の会」力強く始動

中富町 徳升悦子

今の政治どう思う? 埼玉10区市民の会シンポジウムが、去る5月28日(日曜日)坂戸市文化会館で行なわれました。(埼玉10区=坂戸、東松山、鶴ヶ島の3市、川島、吉見、鳩山、滑川、嵐山、小川、ときがわの7町)

2月の川島町に引き続き2回目となる「オール10区の会」の集いには550名が参加しました。

主催者挨拶の後、基調講演の小沢隆一氏は「だまらな市民がだまされない市民になれる」と題して、激動する政治の本質を掘り下げた丁寧で分りやすい話で、昨今の政治に諦めず、見極める力が要るということでした。

リレー発言では、4人の方が発言。自由の森学園の社会科教諭とその教え子の女子大学生の発言は新鮮でした。

最後に各政党の代表が挨拶しました。

「10区市民の会」は、野党と市民の共闘によって、立憲主義を取り戻し、私たちの思いが生かされる政治を実現させるために力強く動き出したことを実感しました。

戦後72年 平和を心に刻む

戦争を語り継ぐ 子や孫の時代へ

8月6日(日)13時30分~16時 坂戸駅前集会施設2階

戦中以上の戦後の困窮(徳升悦子さん)、鹿児島防空壕で(原口健二さん)、平和紙芝居など 九条の会さかど(283-4723 栗原)

ヒロシマ市民の描いた原爆絵画展

8月26日(土)~27日(日) 坂戸市文化施設オルモ2階

8月27日(日)13時30分~ 特別企画 映画「太陽の蓋」上映会
原爆絵画展坂戸・鶴ヶ島地区実行委員会(289-2527 武井)

原爆投下 71年目の真実(6)

末広町 石川裕一

誤りに気付いたトルーマン

政府と軍の思惑がかけ離れたまま投下された原爆。軍の狙いに気付かず「原子爆弾は戦争を引き起こした敵の上に落とされた」と強調したトルーマンが認識の誤りに気付いたのはワシントンに戻った直後でした。

その時の様子が陸軍長官スティムソンの日記に記されています。

「8月8日、私は大統領を訪れ、広島の写真を見せた。原爆投下後の広島では、直径5キロの市街地がごとごとく破壊されていた」。

説明を聞いたトルーマンは、「こんな破壊行為を許した責任は、大統領の私にある」。軍の狙いを見抜けなかった大統領、明確な決断を行なわなかった責任にやっと気付いたのです。

後悔先に立たず

しかし、動き始めた軍の作戦は止まらず、暴走を続けます。テニアン島では、2発目の原爆の準備が整っていきます。止められるのは、最高司令官の大統領だけでしたが、原爆は長崎に投下されました。トルーマンが広島の写真を見た半日後のことでした。

この時の心境を、トルーマンが友人への手紙に記しています。

「日本の女性や子どもへの慈悲の心は私にもある。多くの人々を皆殺しにしてしまったことを後悔している」。

やっと止まった暴走

8月10日、トルーマンは全閣僚を集め、これ以上の原爆投下中止の決断を伝えます。「新たに10万人、特に子どもたちを殺すのは、考えただけでも恐ろしい」。

3発目の原爆投下を計画していたグローブスも、大統領の決断には従うしかありませんでした。日本への原爆投下がやっと止まりましたが、21万人以上の命を奪った末の余りにも遅すぎた決断でした。

事実を隠したラジオ演説

トルーマンは、21万人以上の命を奪った事実を覆い隠したまま、国民に向けたラジオ演説を行ないます。

用意された原稿にはなかった文言を加えての演説でした。「戦争を早く終わらせ、多くの米兵の命を救うために、原爆投下を決断した」。

研究者は語ります。「この言葉は、市民の上に原爆を落とした責任を追及されないために追加したものだ」と。「たとえ非道な行為でも、投下する理由があったほうが、トルーマンには都合が良かったのだ」と指摘します。

作られた「大義」

ラジオ演説で「米兵の命を救うための原爆投下」を訴え、「物語」を作り、世論操作のための演出を行なったトルーマン。8月15日、日本が降伏すると、世論調

査で8割の米国民が原爆投下を支持します。「原爆投下は正しかった」という伝説が生まれたのです。

その後今日まで原爆の被害が伝わらないまま、世界の核開発競争は激烈に続けられていきます。

被爆者との面会で

原爆投下の18年後(1963年)に、トルーマンが一度だけ被爆者と面会したことがあります。

その時も「原爆投下の目的はアメリカと日本、それぞれ50万人ずつの犠牲を出さずに終わらせたのだ」と言い張ります。被爆者と目も合わさない、たった3分間の面会でした。

明確な決断をせず、原爆投下の真実を語ることもなく、責任を覆い隠したまま、トルーマンは88歳の生涯を閉じました。

絵本の紹介

ヒロシマの少年じろうちゃん

元町 新井竹子

この絵本は2016年8月に星雲社から出版され9月には再版となるほど皆さんに活用されている。A4判の半分ほどの大きさで、32ページという小さな本だが、65年間も黙っていたヒロシマ原爆体験者の話だからこそその感動を呼んでいる。

文章化したのはその妹で、山田みどりさん。みどりさんは「ヒバクシャ国際署名東京連絡会」の事務局に属している。それでこの本を持って署名集めに取り組んでいるという。このことは2月23日の「新婦人しんぶん」にも、みどりさんの写真入りで載っている。

私は新潟で反原発運動に取り組んでいる友人から、もう2ヵ月も前に贈ってもらっていた。

読んでみて、じろうちゃんというお調子者だった少年が、原爆を受けた皆さんの友人の死を目の当たりにして



の衝撃の様がよく語られていると感動した。

やさしいことばで事実がしっかり語られていることもいい。子どもたちに読み聞かせながら、大人もフクシマ原発事故とも改めて向き合ってみることが大切かと思う。

また、多くの皆さんがこの本にも学んで、作者のみどりさんのように署名集めにも取り組んでほしい。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

8月24日、9月28日、10月26日(第4木曜日10時~12時) 会場は、北坂戸駅東口の坂戸市文化施設オルモ1階。